The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂学派の『論語』解釈 : 「異端」の説をめぐって
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂研究. 2016, 7, p. 3-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60533
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂学派の『論語』解釈 ——「異端」の説をめぐって——

湯浅邦弘

序言

日本に伝来した朱子学は、日本の文化と学術に大きな影響を与えた。その一方で、朱子学の経書解釈には厳しい批判も浴びせられた。従来の研究では、特に、江戸時代の伊藤仁斎や荻生徂徠の批判的解釈が知られているが、さらに大阪の懐徳堂でも、優れた経書解釈が行われていた[1]。

本稿では、『論語』為政篇の「攻乎異端、斯害也已（異端を攻むるは、斯れ害あるのみ）」という孔子の言葉をめぐって、江戸時代の学者たちが朱子学をどのように受容し、経書解釈を展開していったのか、追究してみたい。この言葉を取り上げるのは、「異端」の語が『論語』中、ここ一箇所に登場する特殊用語だからである。また、その解釈が各々の学問的立場を端的に示す可能性があると予測されるからである。

一、朱子学における「異端」と「小道」

先ず、朱子学における解釈を確認する。『論語集注』では、「攻」は治めるの意とし、「異端」とは、楊朱・墨翟の如く聖人の道から外れた教えであると説く。さらに程子は、楊朱・墨翟以上に害を為す異端として仏教の存在を指摘する。

范氏曰、攻、専治也。故治木石金玉之工曰攻。異端、非聖人之道、而別爲一端、如楊墨是也。其率天下至於無父無君、専治而精之、爲害甚矣。○程子曰、佛氏之言、比之楊墨、尤爲近理、所以其害爲尤甚。學

者當如淫聲美色以遠之、不爾、則駸駸然入於其中矣。（『論語集注』為政篇）

范氏曰く、攻とは、専ら治むるなり。故に木石金玉を治むるの工を攻と曰う。異端とは、聖人の道に非ずして別に一端を為し、楊墨の如き是れなり。其の天下を率いれば父を無みし君を無みするに至り、専ら治めて之に精ならんとするは、害を為すこと甚し。○程子曰く、仏氏の言、之を楊墨に比ぶるに、尤も理に近きを為す。其の害尤も甚しと為す所以。学者当に淫声美色の如くして以て之を遠ざくべし。爾らざれば、則ち駸駸然として其の中に入る。

仏教が批判されるのは、楊墨の言に比べて一見「理」に近いからである。それ故に害もまた甚大であるという。

なお、この「異端」については、後述のように、『論語』子張篇の「小道」との関係が指摘される場合がある。そこで、予め『論語集注』の「小道」解釈を確認しておこう。

小道、如農圃醫卜之屬、泥、不通也。○楊氏曰、百家衆技、猶耳目鼻口、皆有所明而不能相通。非無可觀也、致遠則泥矣、故君子不爲也。（『論語集注』子張篇）

小道とは、農圃、医、卜の属の如きもの、泥めば通ぜざるなり。○楊氏曰く、百家の衆技は、猶お耳、目、鼻、口、皆明らかにする所有りて相通ずること能わず。観るべきもの無きに非ざるも、遠きに致せば則ち泥む。故に君子は為さざるなり。

このように、『集注』では、特に「異端」との関係には触れず、「農圃、医、卜の属の如きもの」「百家の衆技」と定義する。いずれにしても、「遠きに致せば」泥むから、君子は為さないとする。

二、伊藤仁斎『論語古義』

こうした朱子学の立場に対して、新たな説を提示したのは、江戸時代前期に京都で活躍した伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）である。

先ず、仁斎は「異端」という用語は、当時の「方語」つまり俗語であるとした上で、ものの端がまちまちで一つに揃わぬことを言うとする。学問は根本に力を注ぐべ

きなのに、それを端の方から揃えにかかっても害があるばかりだ、という理解である。また、後世、「道徳仁義」ではなく、「記誦詞章」に従事し、知識量の多寡を競うようになったのも、異端を攻（治）めるの類で、本末転倒であると説く。

さらに、『集注』が、異端を楊墨や仏教に比定したことについて、異端の称は昔からあるとし、後人が専ら仏・老の教えを指して異端とするのは間違いであり、孟子の時代には、邪説暴行とか、楊墨の徒とか称したが、まだ異端とは言わなかったとする。仏・老の教えは、異端以上であり、攻める以前の問題だとも批判する。

攻は、治なり。異端は、古の方語、其の端相異にして一ならざるを謂うなり。言うこころは、力を根本に用いずして徒にその端の異なる所を治むれば、則ち益無くして害有るなり。

○後世の学、力を道徳仁義に用いずして徒に事に記誦詞章に従いて、其の多寡を争い、其の短長を較ぶるは、此れ亦た異端を攻むるの類のみ。本末倒置、軽重所を易う。其の害勝げて言うべからざる者有るなり。

○論に曰く、異端の称は、古より之れ有り。後人の専ら仏老の教を指して異端と為す者は誤れり。孟子の時、或は邪説暴行と称し、或は直ちに楊墨の徒と称せり。見るべし、其の時猶お未だ異端を以て之を称せざること。若し夫れ仏老の教は、即ち所謂邪説暴行にして、亦た異端の上に在り。豈に攻むるを待ちて後に害有らんや。（『論語古義』為政篇）

ここには、独特の見解が見て取れる。「異端」を「方語」とするのは鋭い指摘である。それでは、子張篇の「小道」について、仁斎はどのように解したのであろうか。

小道とは、諸子百家の属の如し、是なり。此れ言う、小道とは多く事に便にして且つ效を見ること速なり。故に俗士庸輩、多く悦びて之を為す。然れども之を遠きに致すときは、則ち泥みて通ぜず。故に観るべき者有りと雖も、君子は為さざるなりと。（『論語古義』子張篇）

このように仁斎は、「小道」を「諸子百家の属の如し」とした上で、即効性があるもの（見るべき者がある）として一定の評価を与えている。しかし、「遠きに致す」ときには通じないから、君子は為さないのだと説く。「諸

子百家」を媒介として「小道」と「異端」とが通じていると読み取ることができるかもしれない。しかし、仁斎はこの二つの関連性については直接明言していない。

三、荻生徂徠『論語徴』

さらなる異説を唱えたのは、荻生徂徠（一六六六～一七二八）である。この章に対する徂徠の解釈は、以下のように独特のものであった。

「攻乎異端」、古註に「攻は治むるなり。善道は統有り。故に塗を殊にして帰を同じうす。異端は帰を同じうせざるなり」と。異端は明解無しと雖も、善道と対して言う。故に正義に曰く、「諸子百家の書を謂うなり」と。朱子之に因り、旁ら仏・老に及ぶ。然れども孔子の時に、豈に諸子百家有らんや。且つ「攻は治むるなり」とは、諸を『周礼』の「攻金の工、攻木の工」（冬官、考工記）に本づく。治めて器を成すを謂うなり。故に攻の字は諸を学ぶ者に用うべく、諸を道芸に用うべからず。故に「六経を治む」とは、古是の言無し。況んや諸子百家を治めて之を成すの理有らんや。蓋し攻は、「鼓を鳴らして之を攻む」（先進篇）の攻の如し。異端とは、諸を漢・晋の諸史に稽（かんが）うるに、多くは人の異心を懐く者を謂えり。乃ち多岐の謂なり。人の異心を懐くを、遽に以て之を攻むれば、必ず変を激するに至らん。故に孔子は之を誡しむ。異端の字は它に見えず。独だ『論語』『家語』に見え、而して『家語』註に、「猶お多端なり」と。乃ち孔安国・王粛の輩に、必ず此の解有らん。故に諸史の用うる所は、其の解に依るのみ。魏は漢の祚を簒（うば）い、異端を攻むるを以て務めと為せり。何晏の『集解』は序文に拠れば、何氏の私書に非ず。孫邕・鄭冲・曹羲・荀顗・何晏 名を署すれば、則ち必ず魏の帝の勅を奉じて作りし者なること、唐の『正義』、明の『大全』の如くならんのみ。故に時の忌諱を避け、特に新義を設く。後儒察せず、遂に定説と為れり。「也已」は「学を好むと謂うべきのみ」の如し。明祖（明の太祖洪武帝）は已を解して止むと為す。此の方の学者に、復た已を解して甚だしと為す者有り。皆誤れりと謂うべし。（『論語徴』為政篇）

ここでの最大の特色は、「攻」を、攻める（攻撃）の意とする点である。『論語』先進篇の用例「鼓を鳴らし

て之を攻む」を指摘する。また、「異端」についても、朱子学や仁斎では、諸子百家と仏・老を念頭に置いていたのに対して、孔子の時代まだ諸子百家はなかったのだから、諸子百家ではなくて、「異心を懐く者」の意だと説く。従来には見られない新説である。異心を懐く者を不意に攻撃すると、かえって「変を激する」結果になるので、孔子はそれを自戒していたとするのである。

関連して「小道」についても、次のように説く。

「小道と雖も必ず観るべき者有り」。朱註に、「小道は、農圃醫卜の属の如し」と。之を得たり。何晏は以て異端と為す。仁斎之に因る。然れども諸子百家は、子夏の時の無き所なり。然りと雖も、当今の世、諸子百家は、応に是くの如しと作して観るべし。仏老と雖も必ず観るべき者あり。（『論語徴』子張篇）

徂徠は、「小道」について、『集注』の「如農圃醫卜之屬」とする説を肯定するが、「異端」とする何晏の説については、当時「諸子百家」はいなかったとして否定する。しかし、現在では、諸子百家もそのように（小道として）見るべきであり、仏・老にも必ず見るべき所はあると評価する。

こうした徂徠の説は、大阪の懐徳堂学派にはどのように捉えられたであろうか。

四、五井蘭洲の「異端」説

享保九年（一七二四）、大阪町人によって設立された学問所「懐徳堂」では、初代学主の三宅石庵（一六六五～一七三〇）の折衷的な学風が「鵺学」と批判されることもあった。しかし、助教に就任した五井蘭洲（一六九七～一七六二）によって厳格な朱子学の路線が確立され、以後、これが懐徳堂の基本的精神として継承されていった。

それでは、蘭洲は、この「異端」や「小道」をどのように理解したのであろうか。そこで先ず手がかりとなるのは、『質疑篇』である。『質疑篇』は、五井蘭洲が漢文によって著した随筆で、弟子の中井竹山・履軒兄弟によって校訂され、同じく蘭洲の『瑣語』とともに、明和四年（一七六七）に大坂の文淵堂・得宝堂から刊行された書である。[2] 本書の冒頭に、寛延三年（一七五〇）に蘭洲自身が記した題言があり、普段から中国の経史の諸書を読み、疑問点があるごとに記しておいた文章をまとめて一篇となしたという。ここから、蘭洲の見解を窺うことができる。

攻乎異端。異端、子夏所謂小道之類、與聖人之道異條貫。然亦一道、有可觀者。攻治也。范註、專治也。周禮、攻金攻木。是れ攻金者不攻木、攻木者不攻金、謂專為其業也。斯害而已、亦恐泥之意。治之欲措之國家大業、則拘泥有害矣。孔子之辭峻切、子夏之語較緩、皆欲使學者務為君子儒之意也。（『質疑篇』）

異端を攻む。異端は、子夏謂う所の小道の類、聖人の道と条貫を異にす。然るに亦た一道、観るべき者有り。攻は治なり。范註、専治なり。『周礼』、金を攻め木を攻むと。是れ金を攻むる者は木を攻めず、木を攻むる者は金を攻めず、専ら其の業を為すを謂うなり。斯れ害のみ、亦た泥むを恐るるの意。之を治め之を国家の大業に措かんと欲せば、則ち拘泥し、害有り。孔子の辞は峻切、子夏の語は較緩、皆学者に務めて君子儒為らしめんと欲するの意なり。(3)

ここで蘭洲は、「異端」とは、子夏のいう「小道」の類であると、先ず「異端」と「小道」との類似性を明確に指摘する。そして、異端とは「聖人の道」とは異なるものであるが、これも一つの道であり、見るべき所はあるとする。そして、為政篇の「異端」と子張篇の「小道」を比較して、孔子の言葉（異端）は「峻切」、子夏の語（小道）は「較緩」という違いはあるが、いずれも学者に「君子儒」たれと説く点では同じだと説く。「異端」は『論語』の中でこの一条のみに登場する特殊用語であるが、蘭洲は「小道」との関係に注目して、その意を説くのである。

ただし、ここには、荻生徂徠の『論語徵』に対する見解が記されていない。そこで次に、蘭洲の徂徠批判をまとめた『非物篇』を検討してみよう。『非物篇』は、五井蘭洲の主著で、荻生徂徠の『論語徵』を批判したものである。蘭洲は江戸在住中に徂徠の著に触れ、本書の執筆を開始、蘭洲没後四年にあたる明和三年（一七六六）、中井竹山によって校訂・浄書された。(4)

非曰、皇疏曰、「古人謂學為治。故書史載人專經學問者、皆云治其書治其經也」。是矣。荀子曰、「治列子禦寇之言」。莊子曰、「治詩書礼樂易春秋六經」。徂徠何以言古無是言也。攻訓治者、猶訓為也。孟子曰、「固矣哉、高叟之為詩也」。治國亦謂之為邦。周礼、攻金攻木。是攻金攻者不攻木、攻木者不攻金。謂專為其業也。何必兼成器之義。人懐異心之説、可笑之甚。

彼又曰、「孔子之時、豈有諸子百家」。孔子已前、亦

可必其無乎。管仲老聃之倫、亦自立一家之言。其侘泯没名不傳者、猶有在焉。安得以今不存遽断其無焉哉。（『非物篇』為政篇）

非に曰く、皇疏に曰く、「古人学を謂いて治と為す。故に書史人の経を専らにし学問する者を載するに、皆其の書を治めて其の経を治むと云うなり」と。是なり。『荀子』曰く、「列子禦寇の言を治む」。『荘子』曰く、「詩書礼楽易春秋の六経を治む」と。徂徠何を以て古に是の言無しと言うや。攻 治と訓ずるは、猶為と訓ずるがごときなり。『孟子』曰く、「固より、高叟の詩を為むるなり」。国を治むるも亦た之を邦を為むると謂う。『周礼』、金を攻め木を攻む。是れ金を攻むる者は木を攻めず、木を攻むる者は金を攻めず。専ら其の業を為むるの謂なり。何ぞ必ずしも器を成すの義を兼ねん。人 異心を懐くの説、笑うべきの甚だし。

彼又曰く、「孔子の時、豈に諸子百家有らん」と。孔子已前も亦た豈に其の無きを必すべからん。管仲老聃の倫、亦た自ずから一家の言を立つ。其の侘泯没の名の伝わらざる者、猶お在る有らん。安んぞ今存せざるを以て遽かに其の焉無きを断ずるを得んや。

このように、蘭洲は、『荀子』『荘子』『孟子』などの古文献の用例から検討して、「攻」は治めるの意で、「為」と同訓であり、攻める（攻撃）の意とする徂徠の解釈は間違っているとする。また、「異端」について、徂徠は、当時まだ諸子百家はいなかったと言っているが、孔子に先行する管仲・老子、さらに無名の学者はいたはずで、そのように断定することはできないとも説く。

『質疑篇』の見解に比べると、徂徠への対決姿勢が鮮明になっていることが分かる。従来、『質疑篇』と『非物篇』との関係については、明確な指摘がなかったが、この点からも、先ず諸書に対する蘭洲の見解が『質疑篇』として徐々に蓄積されて行き、その後、『論語』の部分については、『論語徴』を強く意識して『非物篇』が執筆された、という前後関係を想定することができるであろう。(5)

五、『論語聞書』

いずれにしても蘭洲は、徂徠の説を全面批判するのである。それでは、こうした批判は、蘭洲独自のものであろうか。蘭洲前後の懐徳堂関係者の見解を検討してみよう。

先ず、蘭洲以前の『論語』解釈として、『論語聞書』をあげることができる。これは、三宅石庵と五井持軒（一六四一～一七二一）による『論語』の講義を、受講者が速記し、後に改めて清書した書である。三宅石庵は懐徳堂初代学主、五井持軒は五井蘭洲の父。全六冊からなり、『論語』全編の講義が収められている。文章は漢字片仮名交じりの口語体で、石庵・持軒の口吻そのままに記録されている。各冊末尾の識語によると、一・六冊目が筆記されたのは宝永三年（一七〇六）、二・三冊目は正徳二年（一七一二）、四冊目は正徳三年（一七一三）である。また、講義をした人物は一～三冊は五井持軒、六冊目は三宅石庵であったことが分かる。ただし、四冊目には講義者の名が記されておらず、五冊目には識語がない。

講義が行われたのは懐徳堂創立（一七二四）以前であるが、すでに石庵と持軒とは親交があった。また、持軒の門人たちが後に石庵の門下生となり、懐徳堂創設に深く関わっていた。従って、本書は草創期懐徳堂の学問的状況を知る上で、極めて貴重な資料である。講義は、朱子『論語集注』をテキストとしているが、受講者の大半が大坂の町人であったためか、初学者にも理解できるよう、実生活に即した例をあげ、受講者を教化しようとする姿勢が窺える。

△子曰攻―聖人ノ道ニカハリテコトナル道ヲ一ハタテルヲ異端ト云ウナリ。コレ上ナルヨリアルコトナリ。人ノムマレツキサマザマアル故ニ聖人ノ道ヲ知ラズシテワキヘソレタルコトヲスルガ異端ナリ。堯舜ノ道ニチガフタルコトヲスルガ皆異端ト云フナリ。異端ニサマザマアルナリ。トカク堯舜ノ道ニカハリタルコトヲスルガ異端ナリ。人人ノムマレツキニヨリテ見識チガフ故ニ聖人ノ道ヲ心得ソコナフ時ハ異端ナリ。今時ノ儒者ニモ異端多キナリ。自己見テヨキト定メテソレヲ行ナフガ異端ナリ。

□如楊―孔子仰セラルル異端ガ楊墨ト云フコトデハナキナリ。楊墨ハカヤフナ者ヲ云フトナリ。

□其率―コレ孟子ニアリ。楊墨カヤフニスルト天下ノ君モ父モナクナルナリ。

□程曰―佛氏モ異端ナレドモ孔子ヨリハルカ後ニ唐ヘ来レリ。故ニ圏外ニアリ。サテ異端ニ浅深アリ。佛氏ガ道理フカキナリ。理ニチカキ故ニ害甚シキナリ。聖人ノ道ト同ジヤフナコトヲ云フ故ニ大イニ害アルナリ。似タルホド害ヲスルコトフカキナリ。ヨク似タホド人トリチガヘルナリ。

□學者聖賢ニ至リテカラハ各別ナリ。學者ハ見識定

マラヌ故ニ大イニ遠ザクルガヨキナリ。佛氏ニハマリヤスキナリ。

□不楽—遠ザケル時ハ一サシニ佛氏ノ學ニ飛ビコムトナリ。淫声美色ハ學者ノ大イニ戒ムル所ノ者ナリ。トキ學者タル者佛氏異端ヲ遠ザクルコト、淫声美色ヲ遠ザクル如クニキビシク遠ザケズシテ、苟モコレヲ學ビテ見ンナドト云フテカカル時ハソノ説道理ニ近ク聖人ノ道ニ似タル故ニソノ説ヲ聞トヒトシク馬ノ一サシニカケル如クニ一サシニ佛氏ノ學ニカケコムナリ。カケコムトハヤ害アルナリ。故ニ學者大イニ禁制シテ遠ザクベキ者ナリ。(『論語聞書』第一冊、為政篇、五井持軒講、宝永三年八月十六日、加藤信成書)

これは、蘭洲の父の五井持軒の講義である。ここで持軒は、「異端」がそのまま「楊墨」なのではなく、「楊墨」はあくまで例示であると説く。また、仏教も異端ではあるが、孔子より後に中国に伝来したのであるとした上で、異端にも深浅があり、仏教の道理は深く、理に近いが故に聖人の道と類するところがあり、かえって大いに害があるとする。似ているからこそ害も深く、見識の定まらない学者は仏教にはまりやすいので、遠ざけるのが良いと注意する。

仏教に対する独自の立場を窺うことができる。それでは、「小道」について、『論語聞書』はどのような講義を記録しているであろうか。

△子夏曰雖—致—ソレヲ遠クモテユクコトナリ。泥ナヅミツカエテサキヘモツテユカレヌコトナリ。小サキ道デモ必ズ尤モジャト云フテマナコヲワケミラルルコトアリ。ケレドモ君子ノ大道トチガフテ小道ハヒトトヲリヅツナル故ニ大道ノゴトクニアチコチモッテユクコトナラヌナリ。小道ハ遠キヘモッテユクトツカエアルナリ。タトヘバ医デ云ヘドモ脉ヲミテコノクスリガヨシト云フ時ニトシテソノ薬凶ナド云ウコトアリ。コレツカエナナリ。故ニ病ハ医者ニワタシ吉凶ノコトハト者ニワタスナリ。

●小道—農家圃家ト云フモノ漢ノ藝文志ニアルナリ。許行ナゾカ農ヲ道トスルナリ。皆々道理アレドモ全体エカケテ小サキコトヲ後ニ道ト云タツルナリ。元来ハ道ノハシナリ。ソレニ後ニ尾ヒレヲツケテ全体ヲスマスナリ。医ハ病ヲナヲス一トヲリナリ。トは吉凶ヲウラナフ一トヲリナリ。(『論語聞書』第六冊、子張篇、三宅石庵講、宝永三年暮春十七日、

加藤信昌書）

『論語聞書』第六冊に見える子張篇の講義者は三宅石庵である。ここで石庵は、「小道」と「異端」との関係には言及せず、小道でも、もっともだと評価できる点もあるが、君子の大道とは異なり、小道は一通りに過ぎないので、大道のように応用範囲が広くはないと説く。例えば、朱子『集注』でも例示される医と卜と農とは、領域を異にし、それぞれの分があり、それを超えることはできないという。「小道」に対する適切な理解であると思われるが、「異端」との関連性についてはまったく言及がない。

これにより、蘭洲が「異端」と「小道」を強く関連づけたのは、懐徳堂初代学主三宅石庵の影響によるのではないことが分かる。あえて言えば、父の五井持軒の講義に着想を得た可能性があろう。

六、竹山と履軒

それでは、こうした蘭洲の独特の見解を、その弟子たちはどのように受け止めたであろうか。蘭洲の弟子で、後に懐徳堂第四代学主となった中井竹山（一七三〇～一八〇四）の見解を確認してみよう。

竹山の『論語』解釈は、『非徴』としてまとめられ、蘭洲の『非物篇』と同時に刊行されている。それによれば、竹山は、蘭洲の立場をさらに鮮明にして徂徠批判を展開していることが分かる。

○攻乎異端章

非曰、徂徠好旁引曲證。……獨是章、唯曰稽諸漢晋諸史、而未嘗舉一語以証。……如鮮以懐異心、皆不通。（『非徴』為政篇）

中井竹山は、徂徠には「旁引曲證」の癖があるが、この章に関して、「漢晋の諸史」に基づいたとは言いながら、一語もその例証を挙げていないとし、徂徠の「異心を懐く」という解釈は通じないと批判する。徂徠は、「攻」を攻める（攻撃）の意とした上で、「異端」を「異心を懐く」と解したが、そうした理解は不可能だとするのである。

一方、「小道」についても、仏・老に一定の評価を与えようとした徂徠を批判する。

○雖小道章

非曰、……徂徠既従朱注、又挿入佛老、蓋襲謝氏之誤也。（『非徴』子張篇）

ここで竹山は、徂徠が朱子『集注』に従い、さらに仏・老をも、見るべき「小道」としていることを、謝上蔡の誤りを襲ったものだと痛烈に批判している。こうした仏教批判は、すでに『論語聞書』にも見られた通りであり、懐徳堂学派の特色と言ってもよいであろう。(6)

では、竹山の弟である中井履軒（一七三二～一八一七）はどうであろうか。履軒の『論語』解釈は、『論語雕題』『論語雕題略』を経て、『論語逢原』として完成した。

○子曰、攻乎異端、斯害也已

攻比於治、稍有費力之意。如斯而已。註専治、未允。異端、便是害矣。不必待專精也。

自今觀之、佛氏之學、絶無近理者、或更遠於楊墨矣。程子以爲近理者、何也。蓋宋儒所謂佛道者、指禪法、而禪又佛中之異端矣。非佛之本法。宋代禪法盛行、學士大夫皆墜于其檻阱、雖程門諸子、多不免焉。是一世之風習矣。

一説、攻是攻擊之攻、謂排擊之也。言排擊異端者、非徒以異端乎吾也、特以其害道害人心而已。程子有言曰、道之不明也、異端害之也。害字與此正同、此説亦通。張呂謝楊諸子、皆以攻擊爲説、但解害與此不同。（『論語逢原』為政篇）

履軒は先ず、「攻」（おさめる）について、「治」より、やや力を費やす意味だとし、『集注』が「専治」とするのは妥当ではないとする。

また、「異端」と仏教について、仏教は決して理に近くはないが、程子が理に近いとしたのは何故かと問題提起している。そして、宋儒がいう仏道とは、禅宗のことを指し、禅は仏教の中の異端であり、仏の本法ではないが、宋代には禅が盛行し、程子らもその弊害を免れることがなかったのだと指摘する。

このように、履軒の見解は、「攻」と「治」との微妙な相違を指摘するとともに、宋儒と仏教の関係を批判することに主眼がある。そこで、「攻」を攻撃の意とするのも一説であるとし、特に徂徠の説には言及していない。兄の竹山が徂徠を厳しく批判したのに対して、履軒は無関心といった風情である。これは、徂徠批判がすでに蘭洲や竹山によって充分行われていると感じられたからで

あろう。決して、蘭洲や竹山と立場を異にするわけではない。

そのことは、次の「小道」解釈によって明らかである。

○子夏曰、雖小道、必有可觀者、致遠恐泥、是以君子不爲也。

小道、謂異端諸子百家、是也。農圃醫卜、包在其中。

（『論語逢原』子張篇）

ここで履軒は、「小道」を「異端・諸子百家」であるとし、朱子『集注』の例示する「農圃醫卜」はその中に包括されるとする。小道と異端・諸子百家とを明確に関連づけるのは、蘭洲以来の懐徳堂学派の特色だと言ってもよい。

このように、蘭洲によって明確にされた徂徠批判の立場は、その弟子の竹山・履軒においても継承されたと言える。懐徳堂学派にとって、「異端」「小道」とは、諸子百家を指すとともに、仏教を意味していた。また、明言こそしていないが、懐徳堂学派にとっての最大の「異端」とは、異説を唱える徂徠に他ならなかったであろう。『論語聞書』の「今時ノ儒者ニモ異端多キナリ」との言は、極めて示唆的である。(7)

なお、履軒は、「聖賢扇」という器物を残しているが、そうした観念が、この扇に反映されているのではないかと推測される。

聖賢扇は、中井履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の名を朱筆し、裏面には「醸評」として、これらの人々を酒にたとえて面白く評を加えたものである。原本は失われて存しないが、文政三年（一八二〇）に履軒の子柚園が写したものが懐徳堂文庫に残されている。

そこでは、孔子孟子の正統儒学が「伊丹極上御膳酒」として絶讃される一方、漢代以降の儒者、宋代・明代の儒者については徐々に評価が厳しくなり、また、儒家以外の老荘や仏教、神道、禅宗などには手厳しい評価が下され、(8)さらに、荻生徂徠と太宰春台は「鬼ころし」（とても酒とは思えない）と酷評されている。諸学に対する履軒の評価、特に反徂徠の立場を明快に示す資料であると言えよう。

結　語

以上、本稿では、『論語』為政篇の「攻乎異端、斯害也已」をめぐって、日本の儒学者たちがどのような立場をとったのか、懐徳堂学派を中心として追究してきた。

日本に伝来した朱子学は、特に荻生徂徠によって批判されたが、懐徳堂の五井蘭洲は、朱子学擁護の立場から徂徠の「異端」解釈を厳しく批判し、それは弟子の中井竹山・履軒にも引き継がれた。

もとより、当時の日本の儒者にとって、「異端」とは第一に仏教を指したであろう。ただ、この『論語』の「異端」は、中国古代において、もともと仏教を意味していた訳ではない。中国や日本に仏教が伝来し、儒教との対立が深まる中で、「異端」の最たる者として仏教が意識されたのである。『論語』のこの条についても、「異端」は、諸子百家や老子、さらには仏教など、後世の注釈者によって、その意味内容を異にした。そして、懐徳堂学派の人々にとって、諸子百家や仏教以上に強く意識されていたのは、実は、徂徠学派であった。彼らは、この語に敏感に反応したと言えよう。「異端」は、単なる『論語』の一用語なのではない。自らの学問的立場を示す重要な言葉なのであった。

注

（1）懐徳堂の基礎的な情報については、『懐徳堂事典』（湯浅邦弘編著、大阪大学出版会、二〇〇一年）、及び『懐徳堂研究』（湯浅邦弘編著、汲古書院、二〇〇七年）参照。

（2）『質疑篇』の書誌情報は、次の通りである。大阪大学懐徳堂文庫蔵。一冊、五井蘭洲著、明和三年序、大阪文淵堂・徳寶堂刊本。〔寸法〕二十五・八×十七・八cm。郭内十九・九×十三・四cm。ただし、「刻質疑瑣語序」（中井履軒による）は十九・六×十三・四cm。「質疑篇序」（中井竹山による）は二十・九×十四・四cm。〔版式〕左右双辺、有界、九行二十字。ただし、「刻質疑瑣語序」は左右双辺、無界、五行十字。「質疑篇序」は左右双辺、無界、七行十三字。〔装丁〕四針眼訂法。全四十一葉。なお、以下、資料の引用に際しては、できるだけ原文に忠実に翻刻するよう努めたが、読者の便宜を考慮して、一部文字を通行字に改めたり、原文にはないルビを振ったりするなどの措置を講じた。

（3）なお、本書については、中井履軒が『質疑篇』刊行の際にその中の疑問の存する点についてまとめた上で、中井竹山に質した『質疑疑文』という文献も大阪大学懐徳堂文庫に残されている。『質疑疑文』は履軒の自筆手稿本で、所々に竹山の朱筆書き入れが見られ、『質疑篇』が刊行される以前の過程を窺うことのできる貴重な資料である。それによれば、「攻乎異端」について、中井竹山が朱筆で「異乎條貫、乎ノ字恐ハ削ルベシ」、履軒が墨筆で「欲皆使学者　皆当在欲之上」と記している。『質疑篇』の稿本は懐徳堂文庫に残っておらず、蘭洲の草稿の形成過程は不明であるが、この『質疑疑文』の

注記により、稿本では、もともと「異條貫」が「異乎條貫」、「皆欲使學者」が「欲皆使學者」となっていたことが分かる。

（4）『非物篇』の書誌情報は次の通りである。大阪大学懐徳堂文庫蔵。三巻六冊、五井蘭洲撰、明和三年、中井竹山手稿。〔寸法〕二十七・二×十八・七cm。郭内二十・六×十三・五cm。〔書式〕四周双辺、有界、白口、黒魚尾の紙を使用。十行二十字前後。版心に「（黒魚尾）（篇名／葉数）懐徳堂」と記す。各篇の冒頭のみ篇名を記す。〔内題〕「非物篇（序／巻数）」。〔外題〕書題簽「非物篇」。打付け書き「正編」。〔奥書〕明和三年丙戌長至日。〔装丁〕四針眼訂法。第一冊（巻一・二）四十二葉、第二冊（巻三～五）三十三葉、第三冊（巻六～八）三十三葉、第四冊（巻九～十二）三十三葉、第五冊（巻十三～十六）三十三葉、第六冊（巻十七～二十および附録）本文二十五葉および附録十七葉。

（5）『質疑篇』における『論語』関係条は、概ね徂徠の『論語徵』を意識したものになっている。ただ、徂徠の説を引用してから批判する訳ではないので、『質疑篇』のみを一覧しただけでは、蘭洲の真意が分かりづらくなっている。これに対して『非物篇』は、先ず『論語徵』の該当説を引用し、その後、批判しているために、徂徠の説との違いが明確に読み取れる。徂徠の説に直接触れない本条は、『質疑篇』の『論語』関係条の中でも、やや特殊な条であると言えるが、「異端」に関する蘭洲の徂徠批判は、後に『非物篇』で明確に示されたのである。

（6）『論語』解釈という大枠を外してみると、この点はより明瞭となる。後述の中井履軒には『水哉子』という著作があり、その巻之中「異端篇」では、老子や仏教を異端として述べている。また、履軒の弟子の山片蟠桃の『夢ノ代』にも「異端篇」があり、そこでは、明確に、仏教を異端として批判している。

（7）こうした徂徠批判に対して、徂徠学派からは再反論も行われている。藤澤東畡『辨非物』は、五井蘭洲『非物篇』に対する再反論の書であるが、その「攻異端章」で、東畡は、徂徠説を弁護し、さらに続けて次のように説く。「「異端」謂異見也。蓋人各有其見、見各別其端。而苟與己異見者、乃斷々攻之、或至削小吾道之區域。此竭力攻之、無其功而生其害也已」（「異端」とは異見を謂うなり。蓋し各々其の見有り、見は各々其の端を別にす。而るに苟くも己と見を異にする者には、乃ち断々之を攻むれば、或いは吾が道の区域を削小するに至る。此く力を竭くして之を攻むれば、其の功を無にして其の害を生ずるのみ）。すなわち、「異端」を「異見」（自分と見方を異にする者）と定義した上で、異端にも適する所があるから、包容して残しておけばよい。攻撃すれば、我が道を狭めることになる、と説くのである。この点の詳細については、矢羽

野隆男「泊園書院の『大学』解釈―徂徠学の継承と展開と―」（『中国研究集刊』第五十九号、二〇一四年）参照。

（8）ここで履軒は、仏教と禅宗とを分け、仏教については、「チンタ」（赤葡萄酒）として夷狄人好みと評し、禅については、「焼酎」として「畢竟は毒」であるとする。なお、「聖賢扇」は、デジタルコンテンツ化され、大阪大学文学研究科懐徳堂研究センターが運営するサイト「WEB懐徳堂」で公開されている。